

北海道のフットパスの歴史



小川 浩一郎 (おがわ こういちろう)
 (株)ジオ (THE-O) 代表取締役

1980年札幌市生まれ。2001年エコ・ネットワーク代表代行、13年北海道科学大学客員准教授。札幌市南区常盤で育つ。『フットパス』をキーワードに市内、道内、国内で普及活動、ウォークイベントを実施し、ワールドウォーカーとして世界の「フットパス」を歩いている。「歩く」ことを通じて自然あふれる都市・札幌を観光客へ伝えるべく奮闘中。著書に「北海道フットパスガイド①」「北海道フットパスガイド②」。

「フットパスの歴史」

「フットパスはいつから始まったのでしょうか?」。よく聞かれる質問です。ふと考えてみると本連載で一度も触れていないことに気がつきました。フットパスがイギリス発祥だということはある程度浸透してきていますが、それでは北海道のフットパス活動はいつから始まったのでしょうか?今回は「フットパスの歴史」にスポットを当ててみたいと思います。

まず初めに日本国内での話しをしなければなりません。私が調べてきた中で初めてオフィシャルな形で「フットパス」が登場したのは1970年代に遡ります。東海自然歩道を整備する上での資料の中で「英国のフットパス的な…」という文言が出たのが初めてではないかと考えています。実際に整備されたのは1990年代前半に北海道新得町と東京都町田市で同時多発的に出てきます。前者はまさしく英国風のフットパスを、後者は自然保護活動の一環として出発しています。町田のフットパスについては以前の連載で取り上げましたので、割愛します。新得のフットパスは私たちも何度も歩き、2006年には全道フットパスの集いも開かれています。その後、根室や黒松内、白老、ニセコなど多くの地域へ波及していきます。2000年代前半から後半にかけては、北海道内で爆発的にフットパスの数が増えました(問題もありましたが…)。今では約50の市町村に200コースほどがあると思われ、まだまだ増え続けている最中です。

日本でもっとも古い北海道のフットパス

北海道最古のフットパスは、新得町のヨークシャーファームというペンションのオーナーだった竹田英一さんが、英国のヨークシャー地方で出会ったフットパスを町内で始めたのが最初となります。ご自身が経営されるペンションの周りの羊牧場や旧狩勝線の廃線跡などをつなげた、本場英国のような王道とも言えるフットパスです。残念ながら竹田さんは数年前にお亡くなりになりましたが、生前にお聞きした時はいろいろとお話ししてくれました。もっと当時のことをお聞きすればよかつ



黄葉するカラマツ林と羊牧場内の新得フットパス(新得町)



たと後悔しています。今では日本のフットパス発祥の地として、全国のフットパス愛好家に知られるまでになっています。ですから北海道でのフットパスの歴史は約30年と日本の中でももっとも古いのです。

そこでひとつ疑問が出てきます。フットパスができたことが「フットパスの始まり」になるのか？歩く道ができて歩く人がいなければそれは意味をなしません。ここでもうひとつの要素にも触れる必要が出てくるでしょう。それは北海道で「歩くことを楽しむ人たちが」増えることが重要となってきます。1990年代までは「歩く」と言っても何か目的を持った歩きが主流でした。

「歩くことを楽しむ人たち」を増やす活動

ちょうどこの頃に私の父でもあるエコ・ネットワーク代表の小川巖が、英国・湖水地方へのツアーでナショナルトラストについての講師として同行します。湖水地方にはその名のとおり大小いくつもの湖が点在し、英国の有名な余暇地としても知られています。ピーター・ラビットの作者ビアトリクス・ポターも晩年を過ごした地域で作中にも湖水地方の情景が出てきます。

拠点となるのは、イングランド最大のウインダミア湖という湖です。日本人観光客の多くの方は、湖の東側にあるホテルなどに宿泊し、西側には、ピーター・ラビットで有名なヒルトップ村があります。湖には渡し船はありますが、大きなバスは乗ることができないので、南北に細長い湖をぐるりと半周する必要があります。それでは時間のロスになるので、ヒルトップから湖岸へ小1時間ほど歩いて、渡し船に乗るとホテルまですぐです。歩いてみて景色や穏やかさという点で、北海道にはフットパスがよく似合うと感じたそうです。帰国後はもちろん各所でフットパスの普及を始め、各地のフットパスづくりにも協力することになります。

普及の一環としてフットパスづくりと同じくらい重要な「歩くことを楽しむ人たち」を増やす活動を始めました。



ウインダミア湖を望みながらフットパスを歩く（英国・湖水地方）

北海道各地に増えたフットパス愛好家

当時の時代背景も影響していたのか？1990年代前半はバブルが崩壊した頃です。それに合わせるようにして、多くの人々が自然体験活動を親しむようになりました。それが追い風にもなったようです。この当時はもちろん私はまだ活動に関わっていませんでしたが、実際ITバブル崩壊、リーマンショック後はそうでした。そしてまだ収束していませんが、今年の新型コロナウイルスなどの後には、フットパスに参加する人などが大幅に多くなるのを実感するでしょう。

バブル崩壊の影響があったかどうかはわかりませんが、道新文化センターで歩く講座「エコ・ウォーキング（現フットパス・ウォーキング）」が1992年秋に始まりました。その後、エコ・ネットワークが受け持つようになり、いまだ継続中の人気講座となっています。延べ20万人ほどの札幌市民が今までに参加しています。市内だけに留まらず、札幌市郊外、そして北海道内でできたフットパスを歩くようになり、北海道各地にもフットパス愛好家が増えたと考えています。

この活動が「歩くことを楽しむ」方々を増やし、この人たちが北海道のフットパスを支える大きな財産になりました。目的（地）を目指すハイキングやピークを目指す登山、歴史散策や植物、バードウォッチングとはまた違ったジャンルを北海道に植え付けたのです。

20年ほどフットパスに関わってきた私から見ると、今は過渡期の出口のような感じがします。多くの市町村内にはフットパスコースができました。またそこから複数のコースがある市町村も少なくありません。しばらくはそれで収まっていたのですが、今はそれからさらに隣接する市町村や振興局へとつながり始めようとしています。そうなれば北海道中を歩いて楽しむことができるようになるのではないのでしょうか？新型コロナウイルスの影響で停滞している観光にも、長期滞在が期待できるウォークツーリズムが花を咲かせるでしょう。そうなることを夢見てコロナの収束を祈っている今日この頃です。



約30年続く歩く講座「エコ（現フットパス）・ウォーキング」風景（札幌市）